



Data

監督・脚本・編集・衣装：グザヴィエ・ドラン

原作・脚本：ミシェル・マルク・ブシャー

出演：グザヴィエ・ドラン/ピエールニイウ・カルディナル/リズ・ロウ/エヴリーヌ・プロシュ/マニュエル・タドロス/ジャック・ラヴァレー/アン・キャロン/オリヴィエ・モラン

👁️👁️ みどころ

1989年生まれ、カナダの「早熟の天才」グザヴィエ・ドランの名前を、本作ではじめてインプット！1作目から各種の映画賞を総なめだが、カナダで有名な戯曲を映画化した本作はハッキリ言って日本人にはわかりにくい。

タイトルどおり、クソ田舎における主人公トムの姿を描くもので、登場人物は限られているが、死亡したゲイの友人をめぐる人間模様は奇奇怪怪。

『キネマ旬報』11月下旬号でも3人の映画評論家の評価は分かれているが、難しい作品が嫌いではない私でも、本作の難解さにはイマイチ……。さて、あなたは？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■ 1989年生まれ、グザヴィエ・ドラン監督とは？ ■□■

本作を監督したうえ脚本、編集、衣装そして英語字幕までやったという、1989年にカナダのモントリオールで生まれたグザヴィエ・ドランは「早熟の天才」とか「シネマ界のアンファン・テリブル」と呼ばれているようだ。私は弁護士と映画評論家の「二足のわらじ」を履いてから13年が経過したが、世界にはまだまだ私の知らなかった監督がたくさんいるものと痛感。

本作のパンフレットやネット資料を読むと、6歳で俳優としてのキャリアをスタートさせたグザヴィエ・ドランは①主演も兼ねて19歳で撮った初監督作品『マイ・マザー』（09年）で2009年の第62回カンヌ国際映画祭監督週間部門で3つの賞を受賞し、②監督2作目の『胸騒ぎの恋人』（10年）で2010年の第63回カンヌ国際映画祭ある視点部門でプレミア上映され、シドニー映画祭の公式コンペティション部門で大賞を受賞し、

③第3作目の『わたしはロランス』（12年）で2012年の第65回カンヌ国際映画祭ある視点部門に選ばれ、主人公の恋人役を務めたスザンヌ・クレマンが最優秀女優賞を受賞した、というからすごい。

そのグザヴィエ・ドラン監督の第4作目が本作で、これも2013年の第70回ベネチア国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞した。さらに、第5作目となる『Mommy（原題）』（14年）は、2014年の第67回カンヌ国際映画祭コンペティション部門で審査員賞を受賞したというから、いやはや・・・。

■カナダの「早熟の天才」の名前をインプット！■

ちなみに、1989年といえば、中国では6月4日に天安門事件が、ドイツでは11月10日にベルリンの壁が崩壊した年で、世界が激動した年だ。たまたま私は同年生まれの中国人の留学生を数名知っており、それぞれ興味深い「傾向」を持っている



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFIMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

が、本作ではじめて知ったドラン監督はそんな「レベル」をはるかに超えた存在のようだ。

私は映画評論を書くようになってから、奈良県出身で『殞の森』（07年）で第60回カンヌ国際映画祭で審査員特別大賞「グランプリ」を受賞した河瀬直美の名前や「ある愛の風景」（04年）（『シネマルーム16』70頁参照）、「アフター・ウェディング」（06年）（『シネマルーム16』63頁参照）、「悲しみが乾くまで」（08年）（『シネマルーム19』245頁参照）、「未来を生きる君たちへ」（10年）（『シネマルーム27』177頁参照）、「愛さえあれば」（12年）（『シネマルーム31』62頁参照）等デンマークの女性監督スサンネ・ピアの名前をインプットしたが、本作によって1989年生まれのカナダの「早熟の天才」グザヴィエ・ドランの名前をインプット！

■□■冒頭、ハッキリ言ってよくわからんが・・・■□■

冒頭、フランス語で歌われる意味シンな音楽が流れる中、1人で車を走らせる主人公トム（グザヴィエ・ドラン）の姿が登場する。最初から目立つのが、デンマークの女性監督スサンネ・ピアと同じ、アップを多用する手法だ。トムを演じるのは「早熟の天才」グザヴィエ・ドラン監督自身だが、金髪は地毛ではなく、主人公トム用に染めているらしい。そして、本作のタイトルどおりのファーム＝田舎の一軒家にたどり着いたトムは、



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFIMS Inc.)
MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

何度もドアをノックするが誰も出ない。ケータイ（スマホ?）を何度も空にかざしているのは電波状態を確認するためだが、どうもここはケータイも繋がらないほどの田舎らしい。ところが、1つのドアが開いていたため、トムはそこから無断で家の中に侵入。そして、ダイニングのテーブルにうつ伏してうたたねをしていたところ、アガット（リズ・ロワ）に起こされたからトムはビックリ。このような冒頭のストーリーがスクリーン上で描かれていくが、ハッキリ言ってそれだけでは何の物語かサッパリわからない。

本作はカナダで大ヒットしたカナダのミシェル・マルク・ブシャールが書いた戯曲『トム・アット・ザ・ファーム』の舞台公演を観たグザヴィエ・ドラン監督が「この戯曲を映画化したい!」と言ったところから2人の脚本作りがスタートしたそうだ。しかし、そもそもカナダの人はミシェル・マルク・ブシャールやグザヴィエ・ドランのことをよく知っていても、日本人はそれを知らないはずだ。

■□■解説やコラムが異様に多いのは、なぜ? ■□■

本作のパンフレットの中には①「DIRECTOR'S NOTE」(5頁)、②「PRODUCTION NOTE」(7頁)の他、③「OVERSEAS REVIEW」(9頁)、④「DIRECTOR AND STARRING グザヴィエ・ドラン XAVIER DOLAN 監督&主演」(13頁)、⑤「AUTHOR'S NOTE グザヴィエ・ドランとのコラボレーション」(14、15頁)、⑥「FROM GENERAL DELEGATE OF QUEBEC 日本の映画ファンの皆様」(19頁)がある。

さらに、その他にも⑦佐藤久理子（文化ジャーナリスト）による「INTERVIEW

グザヴィエ・ドラン インタビュー」(10、11頁)、⑧川口敦子(映画評論家)のCOLUMN「不変のドランらしさを真新しく輝かせた快作」(20、21頁)、⑨佐藤アヤ子(明治学院大学教授・日本カナダ文学会会長)のCOLUMN「ケベック州の歴史的背景とブシャーの原作か



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILFILMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

ら見える社会構造」(22、23頁)、⑩馬場敏裕(タワーレコード・オンライン サウンドトラック担当)のCOLUMN「ヤレドによる『ロマンティック・パニック』映画の音楽的解釈」(24、25頁)、さらには⑪春日武彦(精神科医)と吉野湖実(漫画家)の「CONVERSATION 対談」(26～29頁)がある。

これは極めて異例で、要するにこれはこれくらいの勉強をしなければ本作(の背景)はわからないぞ、ということだ。たしかに、これらをきっちり読破すれば、グザヴィエ・ドラン監督がいかに素晴らしい実績をあげてきたかがよくわかる。

■□よくわからん! スリリングな官能的なドラマとは? ■□

しかし、冒頭の紙ナブキンの上にフランス語で走り書きしながらの語りや、1人で車に乗ってファームを訪れるシーンをみているだけで、本作の物語を掴める日本人は少ないのでは? ちなみに、本作が2013年の第70回ベネチア国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞した時の公式批評はその理由を「ホラーのテイストも加味された、スリリングで官能的なドラマ。不安定なセクシャル・アイデンティティを重層的に描き出している。エネルギーで緊迫感にあふれ、ジェンダーとジャンルの中の曲がりくねった道のりを観客が見失わないよう、説得力ある話法で導くことに成功した稀な例である」と述べている。

しかし、日本人には、とりわけ大阪人には冒頭部を観ても「スリリングな官能的なドラマ」って一体何じゃい?と思うのでは?

■□キーマンはギョーム! 彼をめぐる人間模様とは? ■□

トムが到着したファーム(田舎)の一軒家には、死亡したギョームの兄でえらく体格のガッチリした働き者(?)の農夫・フランシス(ピエール＝イヴ・カルディナル)と、息子の死を悲しむ母親のアガットの2人が住んでいた。アガットは自分の留守中に勝手に若い男が家に入り込んでいたのでビックリしたわけだが、トムがギョームの葬儀のために来

てくれたことがわかると大喜び。しかし、2人の会話やトムとフランシスの会話を聞いていると、どことなく話がズレており、トンチンカンな会話になっていることがよくわかる。



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFIMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

それは、トムとギョームはゲイの恋人同士だったにもかかわらず、ギョームは母親にそのことを話していないばかりか、

サラという女性の恋人がいるとウソをついていたためだ。したがって、アガットはトムの来訪は喜んだが、なぜサラが来ないの？と食い下がったのは当然。本作にはギョームの姿は一切登場しないが、金髪でおしゃれな(?)トムの容姿を見れば、なるほど……。しかし、ギョームにゲイの恋人がいたことを兄のフランシスは知っていたらしく、トムには母親に対してウソをつき続けることを要求。そして、葬儀の場では友人代表として母親が喜ぶような弔辞を述べることを要求したが、さてトムは……？

■□■トムとフランシスの関係をどう理解すれば……?■□■

本作前半は、田舎の一軒家の中でクローズアップを多用したそんなストーリーが続いていく。しかし、近時の邦画と違って丁寧な説明がないから、グザヴィエ・ドラン監督についての予備知識のない私は、一生懸命考えながら観ていくしかない。フランシスのトムに対する要求が「強要」になったり「暴力的」になったりするの、両者の体格差によるところが大きい、見方によってはトムがそれだけ女性的だということかも……。

フランシスの要求(強要)どおりにうまく弔辞が述べられなかったことの罰として、トムはギョームとサラのことを母親に話せとフランシスから要求(強要)されたが、この「ウソつき話」をするについてトムが意外に上手だったのにはビックリ。作り話を含めたトムの説明はそれなりに説得力があったから、トムの話から生前のギョームの生活を想像した母親のアガットは一見大喜びだったが……。

ギョームとトムのゲイ関係はきっと繊細でめくるめくものだったのだろうが、グザヴィエ・ドラン監督が描く、トムとフランシスの関係はかなり暴力的で、「支配・被支配の関係」となる。ならば、なぜトムはさっさとこの家から逃げ出さないの？それが一貫した私の疑問だし、同じ疑問を持つ観客も多いはずだ。フランシスの要求どおりのウソをつき、母親に対してギョームのいいお友達というお芝居を演じているトムだが、いい加減それにうんざりしてきたらしい。その結果、ある日「母親にすべてを打ち明けて、ここを出て行く」

とフランシスに言い放つと、それに対するフランシスの行動は？

■□■フランシスの凶暴性にビックリ！彼との同居は大変■□■



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFILMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

昔の、北野武監督の作品に『その男、凶暴につき』（89年）があったが、ここらあたりのフランシスの言動をみていると、それと同じような凶暴性が顕著だ。もちろん、フランシスはヤクザではなく農夫にすぎないから、本来純朴な男なのだろう。しかし、体格がデカく体力があるから、自分の考え方を押し通すとなると……。こんな兄貴とずっと一緒

に生活していたギョームは、さぞ大変だったことだろう。

ところが、このフランシスは意外にもタンゴが達人。大きな小屋の中にトムを連れ込んだ中での男同士の情熱的な（？）タンゴはお見事だが、トムもタンゴを踊れるのはなぜ？それはギョームから教えてもらったおかげだが、そのギョームにタンゴを教えたのはフランシス。しかしなぜ、男同士の兄弟が2人で単語を踊っていたの？ちょっと想像するだけでも気持ち悪いが……。

少子高齢化が進み、認知症の老人の比率が高まる日本では、老人の介護問題が大変。近々鑑賞予定の安藤サクラ監督の『0.5ミリ』（13年）はそれをテーマにした映画だが、フランシスだって母親との2人だけの生活だから、今後もこのファームで母親の面倒を見続けるのは大変だ。トムとタンゴを踊る中、フランシスは少し開放的な気分になったためか、音楽が流れる中でそんなグチめいたことを大声でトムに話し続けたが、そこにいきなりアガットが入ってきたからフランシスはビックリ！ひょっとして、今の話を聞いていたの？そう母親に問いかけたが、さてアガットは……？

グザヴィエ・ドラン監督の状況説明はここでも不足気味だが、フランシスから首を絞められても逆らえないばかりか、「もっと絞めろ」と返すトムの姿をみても、ファームにおけるトムとフランシスの人間関係は奇奇怪怪だ。

■□■トムが案じた「一計」とは？その波紋は？■□■

交通事故で死亡したトムの元同僚で、ゲイの恋人だったギョームの実家は、トムのケータイの電波が通じないほどの田舎だが、通信方法がないわけではない。その結果、トムが案じた「一計」によって、中盤以降、新たに登場する女性がサラ（エヴリーヌ・プロシュ）だ。といっても、彼女は母親がギョームの恋人だったと聞いているサラではなく、トムの女友達。彼女の本名がサラなのかどうかはわからない



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFIMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma
©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

が、とにかく彼女は母親に対してギョームの恋人だったというサラを演じるためにわざわざファームまでやってきたのだから、ご苦労なことだ。それにしても、なぜトムはそんな手の込んだ一計を案じてまでサラ（くり返すがこれが本名かどうかは不明）を呼んできたの？

『キネマ旬報』11月下旬号の「REVIEW 鑑賞ガイド」は、本作について荒木啓子氏が星5つ、内藤誠氏が星4つをつけている。それに対して萩野亮氏は星2つで、「説得力を欠いたこのずさんな脚本と演出はいただけない」と低評価だ。冒頭に紹介したような輝かしい実績を持つグザヴィエ・ドラン監督を、そしてまた第70回ベネチア国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞した本作をここまでこき下ろすのはかなり勇気がいるが、どちらかというと私の評価もこれに近い。そんなトムが案じた一計の波紋は・・・？

■□■サラのお芝居はいつまで？サラの行動は？■□■

サラは、それなりの努力をして恋人だったギョームのことや彼との思い出を母親のアガットに話しているが、さて、そんな素人のお芝居はいつまで通用するの？アガットが相当認知症の進んだ老母ならともかく、本作でみるアガットはまだまだしっかりしているのだから、そんなウソはいずれバレてしまうのでは？そう思っていると案の定・・・。

他方、サラの方もせつかくのトムの頼みだからこんなクソ田舎までやってきたのに、あの暴力的なフランシスの態度は一体ナニ？こんなクソ田舎で、こんなバカげた役割を演じるのはもううんざり。サラがそう考え、トムと一緒にモントリオールに帰ろうと言いだしたのは当然だが、なぜかトムはそれを拒否。トムはまさか自分の車をフランシスの手によって動かなくされてしまったから、「脱出」を諦めたわけではないだろうから、なぜトムはこのファームにこだわるの？もっとも、トムの車がなければ、来た時と同じようにバスで

帰ればいい。サラはそう決心してバスに乗り込んだが・・・。

■□■口裂け男の「寓話」をどう理解すれば・・・？■□■

日本には、1979年の春から夏にかけて日本で流布され、社会問題にまで発展した「口裂け女」の都市伝説がある。また、クリストファー・ノーラン監督の『ダークナイト』（08年）では、「ジョーカー」を名乗る口の裂けた顔にピエロのようなメイクを施した男がポイントだった



© 2013 - 8290849 Canada INC. (une filiale de MIFILIFIMS Inc.) MK2 FILMS / ARTE France Cinéma ©Clara Palardy
2014年10月、新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、テアトル梅田ほか、全国順次公開

（『シネマルーム21』25頁参照）。しかし、本作は、バスに乗るサラを見送る途中で、トムが入った店でその店主であるバーテンダーから口裂け男の「寓話」を聞くことによって、ストーリーが新しい展開を迎えるので、それに注目！

体格のデカイフランシスの凶暴性は本作の最初から顕著だし、どうみても社交性のある男ではないから、近所（まち）では嫌われ者らしい。それはそれで仕方ないが、金髪のトムが1人でバーに入り、ビールを注文すると目立ったのは当然。そこでバーテンダーが（社交辞令として）トムに話しかけてきたわけだが、友人の葬儀のためにフランシスの家に来ていると話すと、バーテンダーはフランシスはこの店に出入り禁止になっていることを説明。

そこまで聞くと、「それはなぜ？」と聞きたくなるのが人情だから、どうしてもストーリーはその方向に進んでいくが、そこでのフランシスの「武勇談」はちょっと常軌を逸している。人間の力がいくら強くても、その力だけで人間の口を左右に裂くのは難しいと思うのだが、フランシスの力をもってすればそれも可能らしい。店の中での客のトラブルはどこでもつきものだが、このバーテンダーの店では、かつてそんなトラブル（傷害事件）が起きたようだ。

■□■あっと驚く結末は、あなた自身の目で■□■

すると、当然フランシスは「前科者」になっているはずだ。すると、あの時自分の首を絞めているフランシスに対して「もっと絞めろ」と言ったのは、かなりヤバかったの？バーテンダーの話聞いたトムがそう受け止めたのかどうかは知らないが、102分というちょうどいい長さの本作は、この「口裂け男」の寓話を受けてそのままラストを迎えるこ

とになるから、アレレ・・・。

しかも、ファームを出て行くについてなぜトムはバスに乗らず、歩いていくの？そんなことをすればフランスが車で追いかけてくることはまちがいないから、またトラブルになるし、そうなれば今度はホントの殺傷沙汰になるのでは？

本作ラストはそんな心配どおりの展開となるから、そこはあなた自身の目でしっかりと。そして、ラストにはあの「寓話」の口裂け男の後ろ姿(?)がチャリと映るので、それにも注目！

2014(平成26)年11月12日記

『シネマ36』でも、カナダの「早熟の天才」に注目！

1) フランスの詩人アルチュール・ランポーは「早熟の天才」だったが、それに匹敵する(?)カナダの「早熟の天才」として私がインプットした名前が、『トム・アット・ザ・ファーム』を監督したグザヴィエ・ドラン。その若手監督のその後の話題作が『シネマルーム36』に掲載する予定の『マミー』(14年)だが、これも2014年カンヌ国際映画祭において、83歳の巨匠ジャン＝リュック・ゴダールと並び審査員特別賞をW受賞したというからすごい。

2) 『マミー』のテーマはグザヴィエ・ドラン監督のデビュー作となった『マイ・マザー』(09年)と同じく、母子関係。とある世界のカナダで、2015年の連邦選挙で新政権成立の2カ月後に可決したのがS18法案。これは公共医療政策の改正が目的だが、中でも発達障がい児の親が、経済的困窮や身体的、精神的な危機に陥った場合は、法的手続を経ずに養育を放棄し、施設に入院させる権利を保障したスキャンダラスな

S-14法案が議論を呼んだ。そんな時代状況の中、ADHD(多動性などの発達障がい)をもつ15歳の息子と、彼を矯正施設から引き取ったシングルマザーの母親との母子関係は？そんなストーリーが展開していく『マミー』のラストには、あっと驚く結末が待っているの、それに注目するとともに、『シネマルーム36』における『マミー』の評論に乞う、ご期待！

3) 更に驚いたのは、そんなグザヴィエ・ドラン監督が6月6日公開予定の『エレファント・ソング』(14年)では、マイケル役で主演すること。同作は、精神科病棟でくり広げられる心理劇を描いたサスペンスドラマだが、私はそれを来たる5月12日に試写室で観賞する予定なので楽しみだ。日本でもアメリカでも、監督兼俳優として活躍する「早熟の天才」は多いが、カナダが産んだ「早熟の天才」グザヴィエ・ドランには、『シネマルーム36』でも更に注目したい。
2015(平成27)年5月8日記